

幸いというか、孟との間には子供がいなかったの、中国には今さら思い残すことはありません。ただ、今でもあの異郷の地に眠っている二人の娘、愛子と美津子には、心からすまないとわびる毎日です。

避難中の苦労や、避難所での悲しくかつ苦しかったこと、さらにその後の三十年近くの中国人としての貧しい生活などを思うとき、戦争は私の人生を無惨にも打ち砕いてしまったことを悔やむばかりです。

私の人生―故郷への道は遠かった―

福島県 鈴木 テル

私は、十六歳から五十七歳になるまでの四十数年間を、中国で生活をしてきました。当時の事を思い出すと、涙が先に出てきます。これは、どのようにして生きてきたかの私の人生記録です。

一 私の生い立ち

私は、茨城県日立市の宮田の在で、大正十五年二月

十六日に生まれました。昭和七年、七歳になって地元の本山尋常小学校に入学し、勉強と家の手伝いをしながら昭和十三年に卒業しましたが、貧乏だったので卒業するとすぐに働きました。

あのころは、卒業前に学校で勤め先を見つけられるようになっていました。

私は、日立製作所に入社しました。このころは交通も非常に不便で、毎日は五時に起きて、母が作ってくれたお弁当を持って出かけました。きついこともありました。友達も一緒でしたので、毎日が楽しかったものです。

私の父は、日立鉱山の鉱夫でした。毎朝、まだ暗いうちに、カンテラを持って、家族のために働きに出て行く父の後ろ姿を見ていました。住宅は鉱山の長屋でした。部屋は六畳二間で、台所がついていました。あまり広くはないのですが、そこに家族七人が住んでいました。子供たちもだんだんと大きくなり、部屋が狭くなってきました。私の兄は、十七歳で海軍に志願し、一年に一度は休暇で帰ってきました。あのころは、ま

だ日本は平和で暮らしやすい国でしたが、段々と苦しくなってきました。でも、私が日本にいたころは、まだ配給制度ではありませんでした。

私は、同じ長屋の友達と、毎日仕事に通っていました。会社は、宮田から北の方にいった助川という町にありました。朝は、バスもありますが、家の近くのバス停からは混んでいて、なかなか乗れないので、四十分ぐらい歩いて、そこから電車に乗って助川まで通っていました。バス代も電車代もかかって大変でした。仕事をするのに時計がどうしても必要だったので、初めての給料が出たときに買いました。値段はもう忘れましたが、給料のほとんどを支払ったと思います。しかし、せっかく初めての給料で買ったのですが、それも長くは持っていませんでした。

ある日、友達と助川の町からすぐ近くの海に遊びに行きました。私の荷物と時計を浜において海に入りました。「もう、そろそろ帰ろうよ」と友達が言うので、浜に上がり着替えをしたとき、時計が無いのに気付きました。家に帰っても親には内緒にしていました。

そのうちにばれてしまい、きつくしかられました。今ならば時計の一つ二つはなんでもないのでしょうが、そのときは家が貧乏でしたから、しかられるのも無理はなかったと、今は思っています。

父の兄にあたる伯父が、茨城県の高倉に住んでいました。農家でしたが、やはり貧乏でした。地主から畑を借りて野菜などを作っていました。たまに伯父さんが、そば粉などを持ってきたことを覚えています。私も一度、父と夏休みに伯父さんの家に行ったことがあります。山の中ですから、もちろん電気がなく、夜になるとランプでしたので、家の中は薄暗いものでした。

伯父さんの家は、七人家族で、長男は黒龍江省甘南県茨城県義合開拓団の団員として渡満しておりました。満州は、畑はただで作ることができるの話で羨ましく思っていました。収穫のよい、よく肥えた畑で仕事をするといい話も聞きました。私の友達で、満州に行った渡辺さんからも、齊齊哈爾^{チチハル}はとてもよい所だから是非来ないか、という手紙をもらったことがあります。

満州には少し憧れていました。

二 満州への旅立ち

伯父さんの長男が、家族を迎えかたがた、嫁取りに茨城の家に帰ってきました。そして、私を長男の嫁にという話を持ち上がりました。まったく急な話なのでとまどいました。

母は反対しましたが、父は自分の兄の息子だからと喜び、賛成しました。でも私は、その人に一度も会ったことがないので心配でしたが、満州には憧れの気持ちもありましたので、はっきりした返事はしませんでした。年は、私よりも十歳も上でした。

長男は、開拓団から十日間の休暇をもらって帰国しており、家族と嫁取りのことで大変に忙しくて、私とゆっくり会うこともできませんでした。

結局は、父の希望もあり、私は嫁に行くことになりましたが、結婚式などは挙げませんでした。

昭和十五年十二月二十六日に、伯父さんの家族一同と渡満することとなり、助川駅を出発しました。母は、助川の駅まで見送りにきました。「満州では生水は飲

んではだめ。食べ物も悪いから注意して食べるように。体にくれぐれも気を付けて」と、母は私の手を握り、目に涙をいっぱいためていました。これが母との最後の別れでした。母は、六十五歳で亡くなりましたが、苦勞の連続でした。妹が、母は死の間際まで、私の名前を呼んでいたと言っていました。

私たちは、まず助川から汽車で福岡まで行き、博多から船で海を渡り、釜山に上陸しました。玄界灘を通るときは、揺れがひどく波が荒いので、みんな船酔いでひどい目に遭いました。京城（今のソウル）に着いたのは夕方でした。みんなで京城の市街に出て食堂に入り、やっと食べる気になりました。京城の駅に着いたとき、私は驚きました。朝鮮人が私を追いかけのです。私も怖いので何も分からずに逃げました。すると、なお追いかけてくるのです。私も家族から離れては大変と思いつながら無我夢中で逃げました。後で分かったのですが、二人のスパイが私の近くから逃げ出したので、私も追われた恰好になったのでした。今では笑い話になりますが、本当にあのときは、恐ろしかった

です。食事を終えて、街を歩き、また京城の駅に戻りました。

また、汽車に乗り、国境を通過して、さらにどんどん進み、満州に入っていました。斉齊哈爾駅に着いたのは朝でした。三日間汽車の中で過ごしました。

汽車を降りた途端、寒くて震えてしまいました。周りは満人ばかりでした。私の夫は満語が達者で、なんでも話しかけるのです。駅で義合開拓団の本部へ電話をして、車で迎えにくるようお願いをしました。そして車がくるまで、市内の旅館で待つことにしました。一日待っても迎えにきません。夜になり、一晩泊まって明日出発しようということになり、初めての満州の一夜を過ごしました。

翌日の朝、トラックが迎えにきました。外は寒く、私は日本から着物できましたから、本当に満州の寒さを実感しました。ようやく本部に着いたときは、もう夕方になっていました。でも本部の皆さんは温かく迎えてくれました。そのときに根本さんという夫婦がいまして、子供さんが一人いましたが、同じ茨城の出身

の方なのですぐに仲良くなり、後々までとても親切にしてもらい、お互いに助け合いました。今は、茨城県の土浦に住んでおられるようです。

三 開拓団での生活

本部に近い所に食堂がありましたが、みんな共同作業で炊事をしました。朝食も一緒に、かぼちゃの味噌汁と白菜の漬物だけだったことを、今でも覚えています。

家は用意してありましたが、義父一家と同じ家で、私たち夫婦は北側の方で寝ました。部屋の中は、オンドル（朝鮮・中国東北地方の暖房装置）でとても暖かでした。

団長さんからいろいろとお話を聞きました。団長さんは、熊本の出身で体はとても小さい人でしたが、張り切っていました。しかし後に、この団長さんのために、団の人はみんなひどい目に遭いました。

住む家は決まりましたが、まだ日本から送った荷物が到着しないので、日常生活に必要な品物がなく困ってしまいました。でも、近所の人はみんな親切な方ば

かりで、いろいろと必要な道具を持ってきてくれました。私は、二日ぐらい休んでから野良仕事に出ました。農業は全然知りませんでした。朝は、外が明るくなったら、もう畑です。昼は、家に帰ったらすぐに食堂でみんなと食事をするので、おかずがなくなっても、とてもおいしく楽しい食事でした。慣れない農作業でしたが、菌を食いしばって頑張りましたので、どうにか一人でも仕事ができるようになりました。

満州に来てから三年間が、あっとい間に過ぎてしまいました。ある日、義父から「一度、日本に里帰りをしてきたらどうか」と言われました。そのときの私の気持ちは、どう表現してよいか分からないくらい嬉しさでいっぱいだったことを、今でもはっきりと覚えています。同じように里帰りする人と一緒に、本部のトラックに乗り拉哈^{ラハ}まで行き、拉哈から汽車に乗り齊齊哈爾^{チチハル}に出ました。齊齊哈爾までは、夫も一緒に来てくれましたので心強く感じました。齊齊哈爾からまた汽車で大連に行く予定でしたが、駅員さんの話では、新京から先に汽車は行かないので、無駄なお金は使わ

ないで一応戻りなさいと言われがっかりしました。事情はよく分かりませんが、せっかくなら楽しんでここまで来たのにと、悔しくて涙が出ましたが、致し方なくあきらめて、齊齊哈爾の駅前の旅館に泊まりました。泊まっても、私は悔しくて、悔しくて眠れませんでした。夢にまで見ていた日本に帰れる、ということが本当に夢になってしまいました。明日から、またあの野良仕事をするのかと思うと、がっかりでした。

本部からの迎えのトラックに乗り、団本部に戻りました。団本部の人からいろいろと事情を聞かれましたが、私はよく分かりませんでした。団本部の人のうわさでは、新京の先で、中国人によって鉄道線路が爆破された、ということでした。

私の夫は、開拓団で家を建てる仕事の監督をしていました。毎日、平和な暮らしでしたが、昭和二十年の春、召集令状がきて北滿の部隊に入隊してしまいました。夫が召集されてからは、義父たちと一緒に生活をしていました。

四 終戦後の逃避行

昭和二十年八月十五日、とうとう終戦になりました。開拓団の人々は、みんな驚きとこれからの生活への不安とで、どん底に落ちました。団長はみんなを団本部に集合させて「日本は戦争に負けたのだ」と言いました。

みんなは、悔しくて泣きました。そのあと団長は、一人一人に小さな紙包みを渡しました。その紙包みの中身は、「青酸カリ」でした。それを服の中に縫い込んでおくように言われました。いざという時には、みんなは、いつかは日本に帰るのだという気持ちでいっぱいでしたので、あまり気にかけませんでした。そのうちに、四十歳ぐらいの一人の男性が日本刀で切腹をしてしまいました。

終戦後から、段々と満人は日本人をいい目で見なくなりまりました。「ざまあ見ろ、お前たちは、満州に来て、畑や牛や馬を取り上げた報いがきたのだ」と言っていました。怒るのも無理はないとも思いました。

しばらくたったある日のこと、団長さんが開拓団のお金とピストルを持って、開拓団本部から逃げましたが、逃げる途中で満人に襲われて殺されたそうです。それから、毎日、馬賊が襲って来ては「金を出せ、ピストルを出せ!」と言って、乱暴・狼藉をしていきます。何もないので女・子供は山に逃げて、身を潜めているだけで、本当に生きた心地がしませんでした。ある日、朝十時ごろ、馬賊が馬車でやって来て、男と女を別々に分けて、男はどこかに連れていかれ、女は広場に座らされました。馬賊は、午後三時ごろに、馬車と一緒に引き揚げていきました。馬賊が引き揚げた後、家に戻りましたが、家の中はめっちゃめちゃに荒らされていました。

私は、馬賊が襲って来たときには家の外にいました。子供は家の中で眠っていたので、急いで子供を連れに家に入ろうとしたときには、もう馬賊は家の中で、子供を連れ出すこともできずに怖くて逃げたのですが、家に戻ってみると、子供は何事も無かったように、私の顔を見て笑っていました。本当に、子供はかわいい

です。何にも知らない子供まで、こんなにつらい目に遭うなんてと、悔しさが一層募ってきました。

話が前後しますが、私は終戦の前に、結婚五年目で女の子を産みました。名前は美子とつけましたが、手間一つかからない子でした。終戦後は、昼でも夜でも、おんぶして野原や山に逃げるのですが、ほかの子供はすぐに泣きますが、美子は泣くことをしませんでした。しかし、この子も長生きはしませんでした。ちょうど一歳の誕生日に死にました。夫は自分の子供の顔も見ずに召集されたのです。

そのうちに、義父が足から血を流しながら帰ってきました。義父の話によると、男の人たちは一軒の馬小屋に詰め込まれ、座らされて殴る・蹴るの暴行を受けました。義父は、体が大きくがっしりしており、年も五十過ぎでしたので、団長と間違えられて、一番ひどい目に遭ったようです。馬賊の頭から「金を出せ、ピストルを出せ」と脅されたが、「俺たちに金など一文も無く、ピストルなども持っているはずがない」と言ったら、短刀で股を突き刺されたそうです。薬など

もありませんので白い布で縛りましたが、命だけは助かったので「よかった、よかった」とみんなで泣いて喜びました。

そんなことがあってからは、夜になるのが一層怖くなり、服は着たままで、靴も履いて寝るようになりました。

それから、毎日のように馬賊が来て、品物をあさり、持っていました。布団も子供の寝ていたのだけを残して、みんな持っていました。ただ黙って見ているしかありませんでした。

秋になると、日一日と寒さが加わり、着るものにも困ってきました。持っていた服や、着物もほとんど持っていかれて、みんなはどうしたらいいのかと悩みました。小林さんという方が、日本の着物を解いて中国服に作り直して、綿は布団をほぐして使い、どうにか着るものができました。

義合開拓団は、大きな道路の近くで、ソ連軍の兵隊や戦車、そして馬賊などが通るので非常に危険な所でした。若い女と見れば連れて行かれるのです。私も二

十二歳でしたので、見つければ大変なので、昼間は家にいませんでした。そんなときには、子供は義理の一番下の妹に預けました。十一歳でしたが、よく子供の面倒を見てくれましたので大変に助かりました。その義妹も、十二歳になってすぐ亡くなりました。医者はいても薬が無いのです。かわいそうなことでした。

でかけるときは、鎌とロープを持っていきました。

一晩家に帰れないこともありました。義母に、顔に墨を付けなさいと言われて黒く塗り、また髪の毛も、ぼうぼうとさせました。義理の上の妹も、半田という人と結婚して子供が二人いましたが、ご主人は兵隊にとられて家にいませんでしたので、私と同じように身を守るのに大変に苦労していました。相変わらず、馬賊や満人に荒らされ、少ししか残っていない食糧までも略奪されるようになり、危険になったので、みんなと相談して、隣の協和開拓団へ移動することになりました。移動といっても荷物はありませんから、簡単でした。

秋も深まってきて、収穫期になり、農作物は豊作で

したが、馬賊や満にとられて私たちの口には入りませんでした。義合開拓団当時、夫と一緒に建築の仕事をしていた宋さんが、よくいろいろな食べ物や野菜などを持ってきてくれました。そのころはもう、米はありません。とうもろこしの粉や潰したものを煮て、その中にじゃがいもやかぼちゃなどを入れ、塩を少し加えて、ご飯とおかずを一緒にしたようなものを作って食べました。とうもろこしを潰したものは、なかなか煮えないので大変だったことを思い出します。しかし、これも長くは続きませんでした。

協和開拓団でも、義合開拓団と同じで、馬賊や満人が襲ってきました。夜はそれほどありませんが、昼間は三日に二日は必ず来るので、油断はできません。義父は、平陽という所に住んでいる宋さんに、いろいろ話を聞き、平陽は町なので馬賊などが襲ってくることは少ないだろうということで、平陽の近くにある東陽開拓団に行くことになりました。

昼間は恐ろしくて歩けませんので、夜になって出発しました。もう冬でしたので寒くて、手や足が凍るほ

どでした。寒くても、いつ、どこから襲われるか分からないので、恐怖心で無我夢中で歩きました。一晚歩き通しで、くたくたに疲れて、朝になってやっと東陽開拓団にたどり着きました。義合開拓団で一緒だった吉澤さん一家も一緒に歩きましたが、一番下の三歳ぐらいの女の子の左手の指が凍傷にかかり、水につけてもなかなか溶けず、一日ぐらいかかりましたが、その指は後でもげました。かわいそうでした。吉澤さんの家は、ご主人が終戦前に病気で亡くなりましたが、奥さんがしっかりした方で、満話はペラペラでした。子供が四人いましたが、一番上の娘さんを私の義理の弟のお嫁さんにももらいました。後に、そのお嫁さんは中国人と再婚し、子供三人を残して病気で亡くなりました。義弟は離婚した訳ではないのですが、当時、若い男が家にいてはいろいろと危険だからという事で、家を出て放浪しているうちに離ればなれになってしまったのです。こんな悲しいことも、戦争のもたらした犠牲の一つです。二度と繰り返したくありません。

五 中国人としての人生

東陽開拓団での生活も、当然のことながら食べることも満足にできず、米はまったく無く、粟やとうもろこしの粉が主体の食事でした。わずかに持っていた品物も、次から次に食べ物と交換し、飢えをしのぎました。夜は一枚の布団に、みんなでくるまって寝ましたが、そのうちに、その大事な布団も満人に略奪されてしまいました。

昭和二十二年四月頃、宋さんの使用人が、私たちを捜しにきてくれました。私たちは、中国人と一緒に今よりは安全で、なんとか生き延びることができるようと思いい、行くところもないときなので、喜んで迎えるの馬車に乗って、家族全員で宋さんのところに行きました。

宋さんの家は、夫婦と子供の四人家族でしたが、とても親切にしてくれました。私たちは、宋さん一家の世話になることになり、私は宋さんの家で、家事の手伝いをするようになりました。義父たちは、一軒の家をもらって農作業をするようになりました。義父は特

にタバコ作りの名人でしたから、宋さんに大変喜ばれました。短刀で刺された足はまだ良くなっておらず、足が不自由なままの仕事で、大変な様子でしたが、それでも元気に働いていました。やっと、毎日が平穩に過ごせるようになりました。そのうちに、義理の妹は宋さんのところの使用人と結婚することになりました。年はだいたい離れていましたが、良い人ですし、いつ日本に帰れるかもわからないので、決心したようです。

着るものは、宋さんの奥さんが親切に持ってきてくれました。食べ物もなんとか不自由なく食べられるようになりました。しかし、この平安な生活も長くは続きませんでした。宋さんは良い人だったので、夜になると必ず私の寝ている所にくるのです。私の寝ている所は、家の中の方でしたが、そこにのぞきにくるのです。それが私にとっては嫌で、この家から出ることを考えました。

宋さんの家から少し離れた、中国人の医者の家で、家事手伝いに雇ってもらい、そこに移りました。家族は三人でしたが、親切な人でした。その家の男の子が

私によくつき、優しくいろいろなと慰めてくれました。日本語も少し分かる子で、「いつか日本に帰れるよ」と励ましてくれました。この家では、秋の終わりがごろまで働きました。

そのうちに、奥さんから私に、義理の弟の嫁になってもらいたいの話がありました。最初は、召集されたまま生死の分からない夫のことがありましたので断りましたが、どうしてもと言われて、義父とも相談しました。当時の状況では、日本に帰れるということは、夢にも考えられなくなっていましたし、また、日本人と知れたら、どんな迫害を受けるかも分かりません。いくら一人暮らしでも、女一人ではやはり無理もありますし、中国人と結婚していれば、なんとか生き抜くことだけはできるだろうと考えました。また、たった一人いた子供も亡くしてしまい、気持ちも落ち込んでいたときでもあったので、結婚を承知しました。そのとき、二十四歳でした。複雑な気持ちでいっぱいでした。

新しい夫の名は張英といい、優しい良い人でした。

結婚後は、比較的に平穩な生活が続き、私も中国人になりきるよう努めました。子供も男四人、女一人の五人をもうけました。しかし、文化大革命のときには、日本人ということで、だいたい迫害を受けましたが、家族に助けられて、なんとか無事に切り抜けることができました。

昭和四十六年の秋ごろ、隣町にあった国営農場の人から「日本人は、希望すれば日本に帰れる」と聞き、矢も盾もたまらず、夫の許可を受けて、一時帰国の手続きをしました。そのときは、茨城の兄が身元引受人になってくれました。

翌年、一番下の子供を連れて、毎日毎日夢に見ていた懐かしの日本の土を踏みました。三十年ぶりの日本でした。この喜びは、何と言ってよいか分からないものがありました。今までの苦勞が、いっぺんに吹き飛んだような気持ちになりました。父母の墓前でしばらく泣き崩れてしまいました。生きていてくれればよかったのにと、残念でなりませんでした。三カ月ぐらい日本にいましたが、車の多いこと、品物が豊富なことに

びっくりしました。日本は、戦争に負けたのに、よくこれまで頑張ったものと、日本人の努力につくづく感心しました。

中国に帰ってから、家族全員で日本に永住帰国をしたいとみんなに相談しましたが、当時、夫は病気がちでもあり、また言葉のこと、生活習慣のことなどが心配で、また苦勞をすることになるからと言って反対しました。夫は、一九八一年（昭和五十六年）に病気で亡くなりました。

六 日本への引揚げ（永住帰国）

子供たちも末子を除き、みな結婚しましたので、念願の永住帰国の意思を固めました。再び茨城の兄に、永住帰国のための手続きを依頼しましたところ、なかなか返事をくれません。何度も催促しました。そのうちに返事がありました。家庭の事情で保証人にはなれないという内容でした。私は、がっかりしました。

そんなある日、本田さん姉妹が、私を訪ねて見えました。本田さんは、以前近所におられた方で、私もよく遊びに行っただおうちです。

当時は、お母さんもお元気で優しくしていただきました。本田さん姉妹がこられたのは、日本に帰国した
いが、日本の字がよく書けないので、私に手紙を書い
てもらいたいと頼みにきたのです。親戚が福島県に住
んでいるはずと言うので、さっそくその住所を市役所
に手紙を出して調べてもらいましたら、返事がきて親
戚の人が見つかりました。その人は本田さん姉妹の伯
父さんでした。

本田さん姉妹の事情を手紙で知らせると、さっそく
喜んで保証人になってくださり、本田さん姉妹は、無
事帰国することができました。

本田さんが、帰国してから私のことを、その伯父さ
んに話をしたらしく「俺のめこ（女子）は、鈴木さん
に世話になったのだから、俺は喜んで鈴木さん親子の
保証人になってやる」という手紙がきました。この手
紙を読んだときは、嬉しくて嬉しくて涙が止めどなく
でてしまいました。私は、本田さんの伯父さんのおか
げで永住帰国ができました。このとき、つくづく人の
情けの有り難みを感じました。

一時帰国の際、日本語が満足に話せず、意思が十分
に通じなくて、みなさんに笑われましたので、今度は
そんなことの無いようにと、本を読みながら一生懸命
に日本語の勉強をしました。

昭和五十七年五月に、永住帰国ができました。まだ
独身だった末子を連れて帰りました。本当は、私の故
郷である茨城に帰るのが当たり前でしたが、本田さん
を頼って郡山に行きました。郡山駅では、いろいろな
人が旗を持って迎えてくれました。住む所も決まっ
ていましたし、生活に必要な品物もいろいろ頂きました。
すべて本田さんの伯父さんのご配慮です。市役所での
手続きもすべて終わりました。仕事も決まっていまし
た。温かい受け入れには心から感謝しました。息子も、
私と同じ職場でした。学校の食堂勤務で、給料は安い
のですが、食事は無料で大変に助かり、四年もここで
働きました。

私が日本に帰って一年目に、子供たちの受け入れ手
続きを始めました。最初は娘夫婦と子供三人で、市で
団地の一軒をいただきました。続いて三男一家、長男

一家が日本に來ました。次男一家がまだ中國に残っています、これもなるべく早く呼び寄せたいと念願しています。

私の人生は時代の流れにしたがって、思いも掛けない波瀾万丈となりましたが、滿州・中國時代の、人にも言えない苦難も今は過去のこととなり、孫十人に囲まれて平和な、幸福な、何の不自由のない暮らしをしています。しかし、異郷の地で、日本に帰ることを最大の希望としながら亡くなった人々のことを思うと、胸がいっぱいになります。

私にとっての戦前・戦後

神奈川県 大屋 博美

一 私の生い立ち

私は、平成九年の六月四日をもって八十二歳となりました。父勝喜（明治十九年生）、母ウタ（明治二十七年生）の長男として門司市に生まれました。

父は、四男であったが、長男としての役を引き受けていたようだ。それは長男、次男、三男が、すべて次々と早死にをしたからに違いないと思っている。父は常々「兄弟は、多い方が楽しいものだ」と言っていた。そのせいかどうかは知らないが、私の後に五人の子供をつくった。母が病気で早死にをした後に後妻を娶ったが、その継母との間にも、五人の子供をつくった。戦後の日本では珍しいかもしれないが、明治・大正のころには、どこの家庭でも子だくさんが普通であり、あまり珍しいことではなかった。

父は、北海道帝国大学の林学科を卒業して福岡県に帰り、県内の郡役場に勤務したり、農学校の先生をしたりしていた。そのうちに、先輩の薦めもあって、東洋拓殖という当時の国策会社に入社した。その後は、平凡なサラリーマンとして、内地（日本）と朝鮮との間を行ったり来たりしていた。私は、後に大学を卒業して、滿州拓植公社に職を得たから、父と同じような人生経路をたどったといつてよからう。

その生活の軌跡をたどると、北緯三十二度から五十